石見空港建設予定地内遺跡発掘調査概報Ⅲ

―― 大溢 仁右ヱ門山 相生 ――

1991年3月

島根県教育委員会

はじめに

石見空港は石見西部に位置する益田市郊外の低丘陵地帯に計画され、平成5年の開港に向けて造成工事が進んでいます。この事業に先立ち、島根県教育委員会は島根県土木部の委託を受けて3ヵ年で埋蔵文化財の調査を実施しました。

本年度は第3年次にあたり、平成2年4月より平成3年1月までの期間を費やし、滑走路の西側を中心に点在する遺跡を対象として調査を進めてまいりました。今夏は例年になく炎天が続き、また、現場も広域にわたっておりましたが、無事に調査を終えることができました。その結果、古代の集落跡や江戸時代末頃の瓦窯跡など、この地域における人々のくらしを知る貴重な資料を得ました。

以下はその調査概要です。この小冊子が石見地域における歴史の解明に多少なりとも役立てば幸いです。

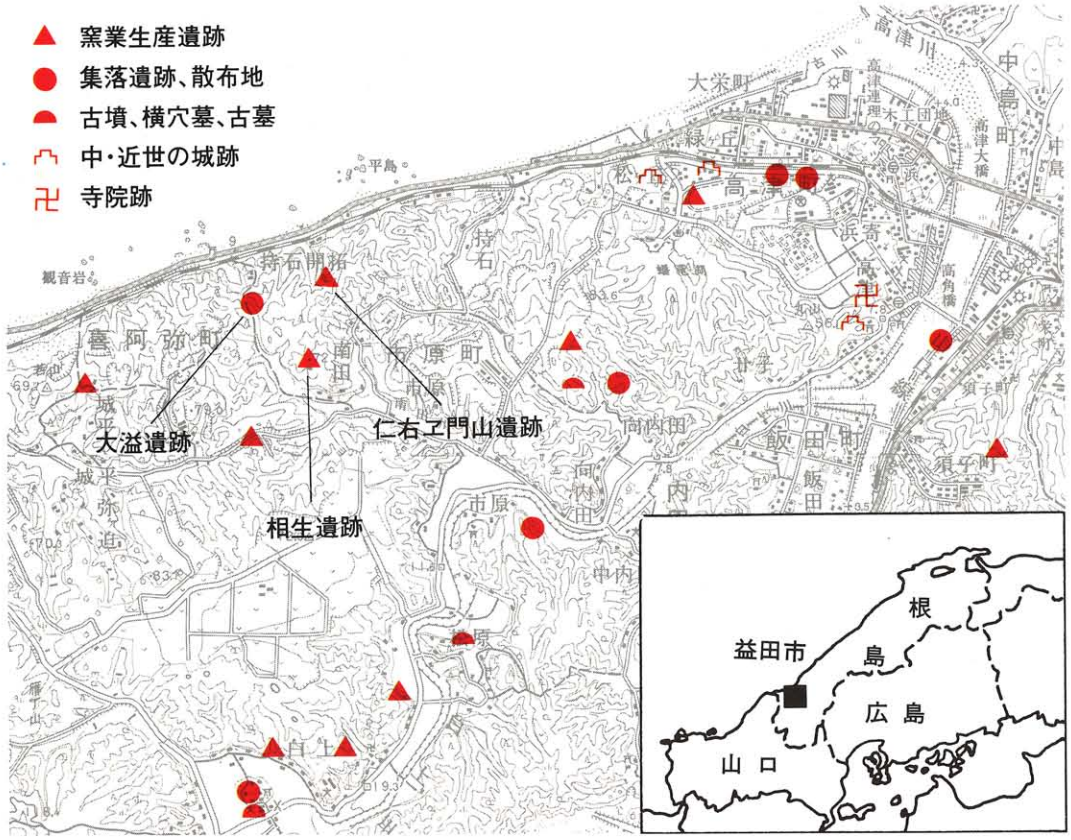

図1　遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25000）

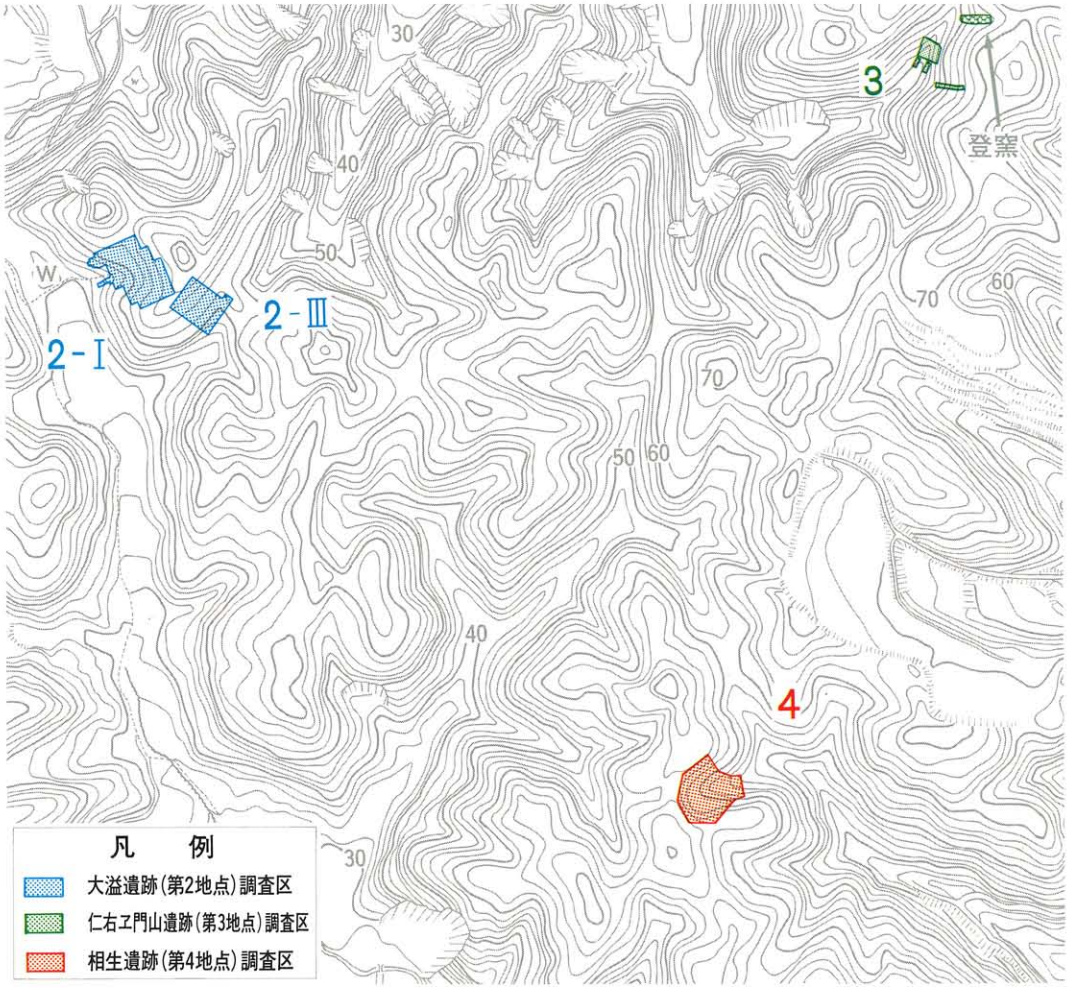

図２　平成２年度　発掘調査区位置図（１：5000）

調査のあらまし

今年度は**峠（とうげやま）山遺跡**、**ゴセコウ遺跡**の範囲確認調査と、**大溢（おおえき）遺跡**、**仁右ヱ門山（じんえもんやま）遺跡**、**相生（あいおい）遺跡**の本調査を実施しました。

大溢遺跡（第２地点、古代集落跡）は５月から12月まで約2,300㎡を調査、仁右ヱ門山遺跡（第３地点、近世の瓦窯跡）は12月から１ヶ月で約220㎡を調査、そして相生遺跡（第４地点、近世の瓦窯跡）は５月から12月まで約1,600㎡を調査しました。

その他の遺跡については範囲確認調査の結果、遺構・遺物とも確認することができませんでした。

位置と環境

益田市は東西に細長い島根県の西端に位置しており、北に日本海を臨み、三方は中国山地から続く山並みに囲まれています。平野部は東からの益田川、南からの高津川の流入によって形成されており、石見部最大の規模を有します。この２つの河川は流域に豊かな稔りと豊富な水をもたらしてきました。また、県内にあっては日照時間が長く、比較的温暖な気候です。交通の面では、広島県西部、山口県各地とも比較的短時間で結ばれ、山陰とこれらの地方とを結ぶ重要な分岐点の１つとなっています。

このような立地条件のもと益田市は経済的、文化的に石見西部の中心地の１つとして発達してきました。

歴史的にみても、古くは縄文、弥生、古墳時代のものから、三宅御土居(みやけおどい)跡、七尾(ななお)城跡など中世益田氏関係の遺跡、近世、近代の窯業生産遺跡など古くからの人々の営みや、他地域との交流をうかがい知る上で重要な遺跡、文化財が東部地域を中心に数多く知られています。

さて、石見空港は前述しました平野部の西側丘陵地に計画されております。これまでに予定地内の東側において北ケ迫(きたがさこ)遺跡（瓦窯跡）、フケ田平(たひら)遺跡（中世の祭祀跡）、根ノ木田(ねのきだ)遺跡（古代の祭祀跡、その他）などの調査を行い、多くの成果を得ました。

大溢遺跡

この遺跡は標高70mの斜面に営まれた古代集落跡です。周囲一帯は山林ですが、丘陵の西側には南に伸びる谷（地元では溢(えき)と言います）があり、最近までその狭い谷筋で水田や畑が営まれていました。また、これらに伴う溜池も数ヶ所で認められています。

発掘は、まず、範囲確認調査として丘陵全体を３つに区切り、西側斜面をⅠ区、尾根をⅡ区、東側斜面をⅢ区として始めました。この結果、Ⅰ区とⅢ区で遺構を検出しましたので、引き続き本調査も実施しました。

写真１　大溢遺跡　Ⅰ区（南から）

Ⅰ　　区

Ⅰ区は、馬蹄形をなす尾根の内側にある緩やかな斜面に立地しています。後世の畑作により部分的に改変されていましたが、調査により地山をＬ字状にカットしたかなりの広い平坦面と５棟の建物跡を検出しました(図３)。この造成は東側斜面において２時期、北側斜面では３時期に行われており、その都度、掘立柱による建物が建てられています。これらの建物はこの場所において生活が始められた当初には１ないし２棟が、多いときには数棟が建てられていたようです。また、平坦面の山際には幅15～20cm、深さ５～10cmの浅い素掘りの溝がめぐっています。これは雨水や生活排水を流すためのものと考えられます。なお、各平坦面には広い空地が認められます。ここは作業場として使われたことでしょう。

建物跡に伴う柱穴は１棟を除いて山側の列のみが残り、谷側のものは崩壊し、現存しておりません(写真１)。しかし、規模とプランを知ることは可能で、桁行は３間のものと４間のものがあります。全体の構造が判るものは南端の建物跡Ⅳ（写真２）で、規模は当時の一般的な大きさであった梁間２間（4.5m)、桁行３間（６m）です。この建物跡は建物跡Ⅲに伴う柵列や溝を埋めて床面を造り、さらに山側の斜面を新たに２m削って溝を掘っています。建物跡Ⅴは柱穴が重なって掘られており、建て替えたことがうかがえます（図３)。

遺物としては、弥生時代の石斧（１個）と奈良時代末より平安時代初めにかけての多量の**須恵器・土師器**と少量の鉄器・石器および江戸時代末より明治時代に至る少量の陶磁器があります。

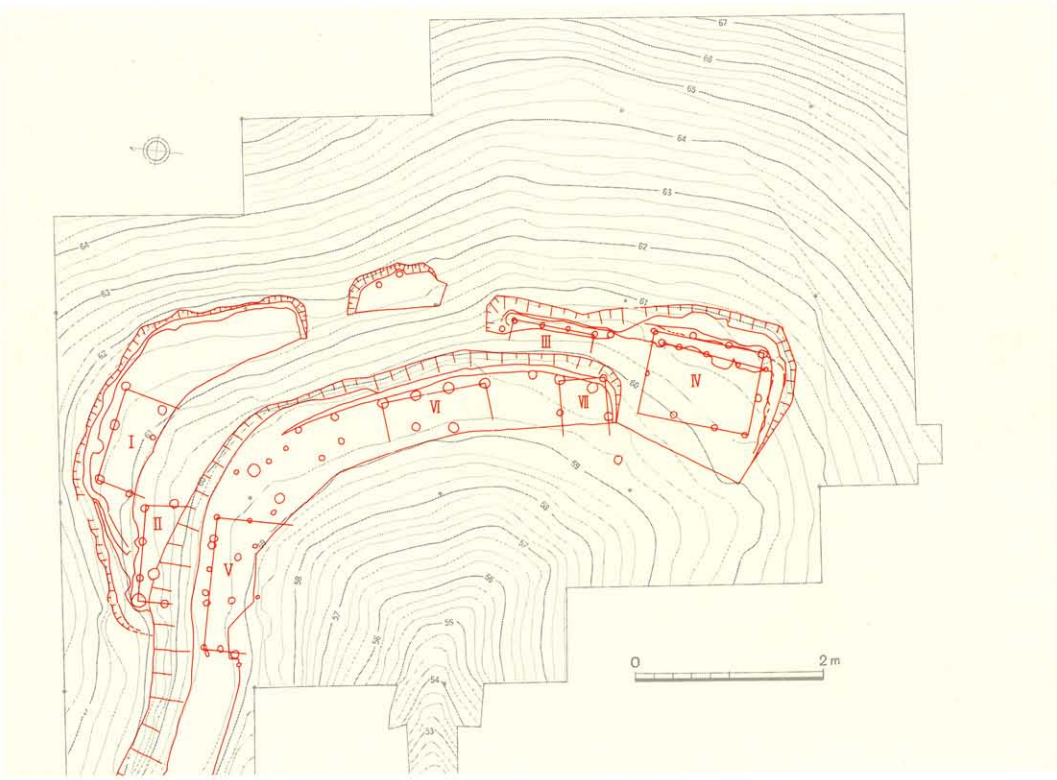

図 3　大溢遺跡　I 区遺構配置図

平安時代の遺物は建物跡に伴い、遺構面や西側の谷部より出土しています。土器の器種としては、土師器では甕(かめ)が、須恵器では蓋(ふた)と坏(つき)が多く、他種はわずかしか認められません。須恵器のうち蓋には輪状のつまみがあり、坏には低い高台(こうだい)が付き、8 世紀末より 9 世紀初めで、平安時代前期に属します。なお、土師器の甕の中には器表に叩きをもつものも 1 点ですが認められます。

特殊なものとしては、製塩と製鉄に関係する遺物も発見されています。塩をつくる土器としては、運搬容器でもある内面に布目痕をもつ**焼塩坩**(やきしおつぼ)が少量出土しています。また、谷部でも焼け石、焼土、炭が多く認められることにより、前述の炉跡で製塩が行われていたことを裏付けています。

製鉄関係の遺物としては、数個の**鉄滓**(てつさい)（鉄(かな)くそ）とフイゴに使う**羽口**(はぐち)の破片があり、この集落内で鍛冶(かじ)を行っていたことを物語っています。

III　　**区**

III 区は丘陵の東側に当たり、海風を避けることができるように、標高70m余りの尾根を挟んで I 区の裏側に位置します。尾根の 1 ～ 3 m下にある斜面から

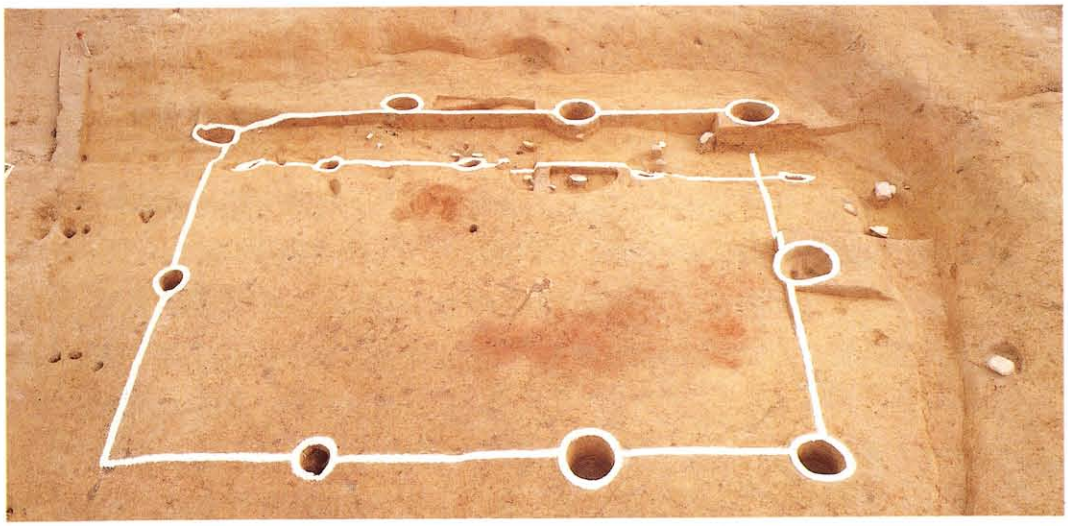

写真２　大溢遺跡　Ⅰ区建物跡Ⅳ（西から）

谷部にかけて、25×30mの調査区を設定して発掘しました。この区の谷部においてはⅠ区と同様に近年までの畑地が見られましたが、斜面は山林で農地としては利用されていませんでした。

Ⅲ区では、遺構は斜面中腹の地山を上下２mの間隔でL字状にカットし、２段の平坦面を形成しています。それぞれの段にはⅠ区と同様に浅い溝がめぐり、その内側に掘立柱の建物を設けています（写真３）。しかし、遺構を検出した時点では柱穴の１列が残るのみで、平坦面の大部分は崩壊しており、規模などは不明です。上段の柱穴列から下段の地山を削り落とした面との間隔は、Ⅰ区と同じような規模の掘立柱建物を建てるのには不十分であり、何かの事情で住居を造り替えたと考えるのが妥当でしょう。また、それぞれの遺構面の左右には長さ２mほどのテラスが付属しています。しかし、ここからは遺構は検出されず、その性格については不明です。

なお、下段平坦面の南側にはⅠ区と同様に直径80cm前後の炉跡が４個認められます。その位置は下段の南端と、南西隅の柱穴に隣接するものがそれぞれ１つずつと、これらのちょうど中間に重複して２つ検出されました。

遺物としては以下の物が出土しています。多量の**須恵器・土師器**、石器が４個（うち２つはスクレーパー、他は弥生時代の石器用砥石（といし）と楔（くさび）形石器）、前期深鉢（ふかばち）の口縁部１片を含む縄文土器の破片４個、古銭１枚（天保通宝（てんぽうつうほう））、多量の焼け石などです。これらの遺物は上記の遺構から出土したものもありますが、多くは遺構より３～５m下の谷部からのものです。なお、石器、縄文土器、古銭な

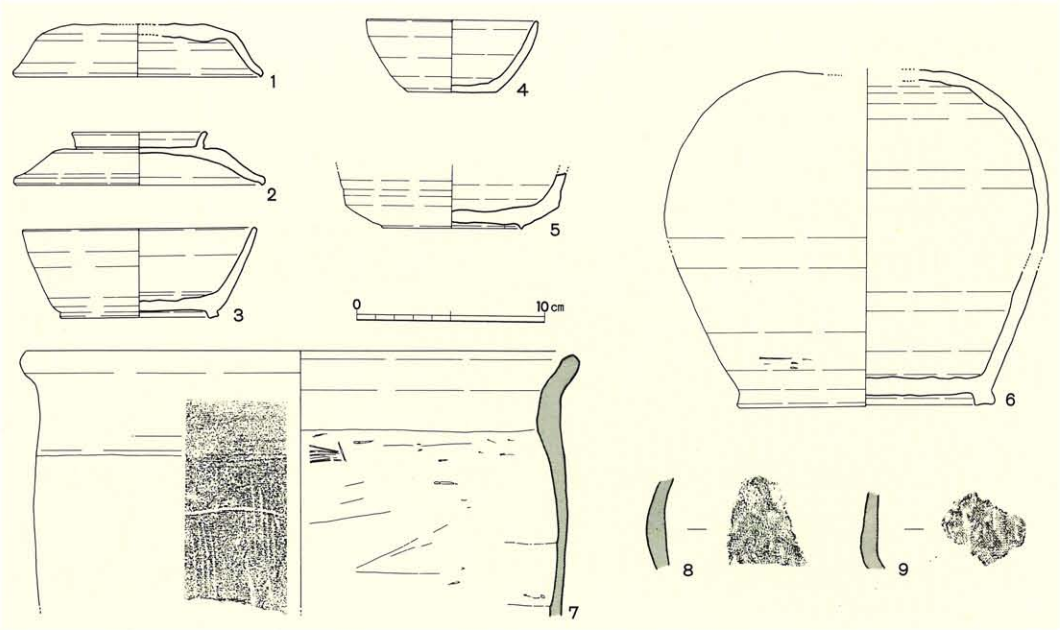

図 4　大溢遺跡　Ⅲ区出土土器実測図

どはこれら遺物の出土状況から見て今回検出した遺構と関連があるとは考えられません。

須恵器の器種については、輪状つまみの付いた蓋と低い高台をもつ坏、および甕などの破片が多く認められました。また、高台のない坏、壺（つぼ）、高坏（たかつき）もわずかですが見られました。これらの須恵器の時期はⅠ区と同様で、奈良時代末より平安時代初めに属します。

土師器についてはそのほとんどが甕です。また、内側に布目痕の付いた**焼塩坩**の破片も少し出土しています。このことは下段建物跡の炉跡、多量に出土した焼け石とともに、このⅢ区においてもⅠ区と同様に小規模ながら製塩が行われていたことを物語っています。

写真 3　大溢遺跡　Ⅲ区全景（東から）

仁右ヱ門山遺跡

持石海岸から南に伸びる支谷の最奥で見つかったこの遺跡は、近世後期の赤瓦(釉薬瓦)、日常雑器を生産した窯跡です。調査前の観察から**登り窯**1基、広範囲にわたる**物原**及び作業場跡と考えられる平坦面が確認できました。調査は空港建設範囲にかかる物原(ものはら)の一部約220㎡を対象におこない、遺跡の大部分はそのまま残ることになりました。

調査対象となった物原は谷底の平坦面が途切れる部分にあたり、表面上に多量の瓦片、窯道具が散布していました。表面を掘り下げると瓦などを全く含まない層がみられこれが瓦窯が操業を始める前のもとの地表面だったようです。現地表と旧地表との比高差は最大で2.5mあり、その間には瓦の堆積する層、土だけの層などが幾つもみられました(写真4)。瓦の堆積層は窯で瓦を焼き出した際に出た不良品を投棄したものらしく、熔着したもの、曲がったものなどがほとんどでした。中には日常雑器の破片も数多くみられました。土だけが堆積した層は谷の埋め土(造成土)だったようです。

写真4　仁右ヱ門山遺跡　物原断面

物原からの出土品をみると多種類の赤瓦を生産していたことがわかりました。**桟瓦**はもっとポピュラーなものですが、屋根に葺く場所によって幾つかの形態があります。軒先に並び文様を持つ**軒桟瓦**、妻側には袖瓦、軒と妻の接点にくる角瓦などがそうです。その他にも棟積みに使われる熨斗瓦、輪違い、棟瓦、棟止瓦、軒巴、丸瓦などがあります。

鬼瓦は雲の形をデフォルメした形態で、中央に家紋を入れたものや大形品も含まれます。また屋根の飾りに使った獅子像も数個ありました。

掛瓦は屋根の破風に葺く、平面が平行四辺形を呈する桟瓦の一種です。この掛瓦の中の一枚には、裏側（凸面）に「文政五年　午七月十日」と刻んでありました（図５－３）。このことは、文政五年、すなわち1822年（江戸時代後半）を前後する時期にこの窯が操業していたことを示しています。

更に興味深いことは、この掛瓦の軒の文様は他の軒桟瓦の文様とは異なることです（図５－１、－２　写真５）。この文様パターンは益田市、邇摩郡温泉津町の寺院、神社所用の燻し瓦（還元炎焼成された無釉の黒瓦）の文様に近似するほか、近畿地方の城跡、寺院のそれや福井県で作られた赤瓦とも共通しています。近畿地方では18世紀前半には出現する瓦当文様ですが、石見地方での出現時期はなお不明と言わざるをえません。

赤瓦と黒瓦 ── 外観の全く異なる両者ですが軒文様という意匠に共通性を持っていることは事実です。これは赤瓦の生産が従来の燻し瓦のそれと時空を共有して発展していたことを示しているようです。とすれば赤瓦の出現とその後の展開を考える上では、燻し瓦の生産の動向も視野に入れた検討が必要となるでしょう。

写真５　仁右ヱ門山遺跡　出土瓦

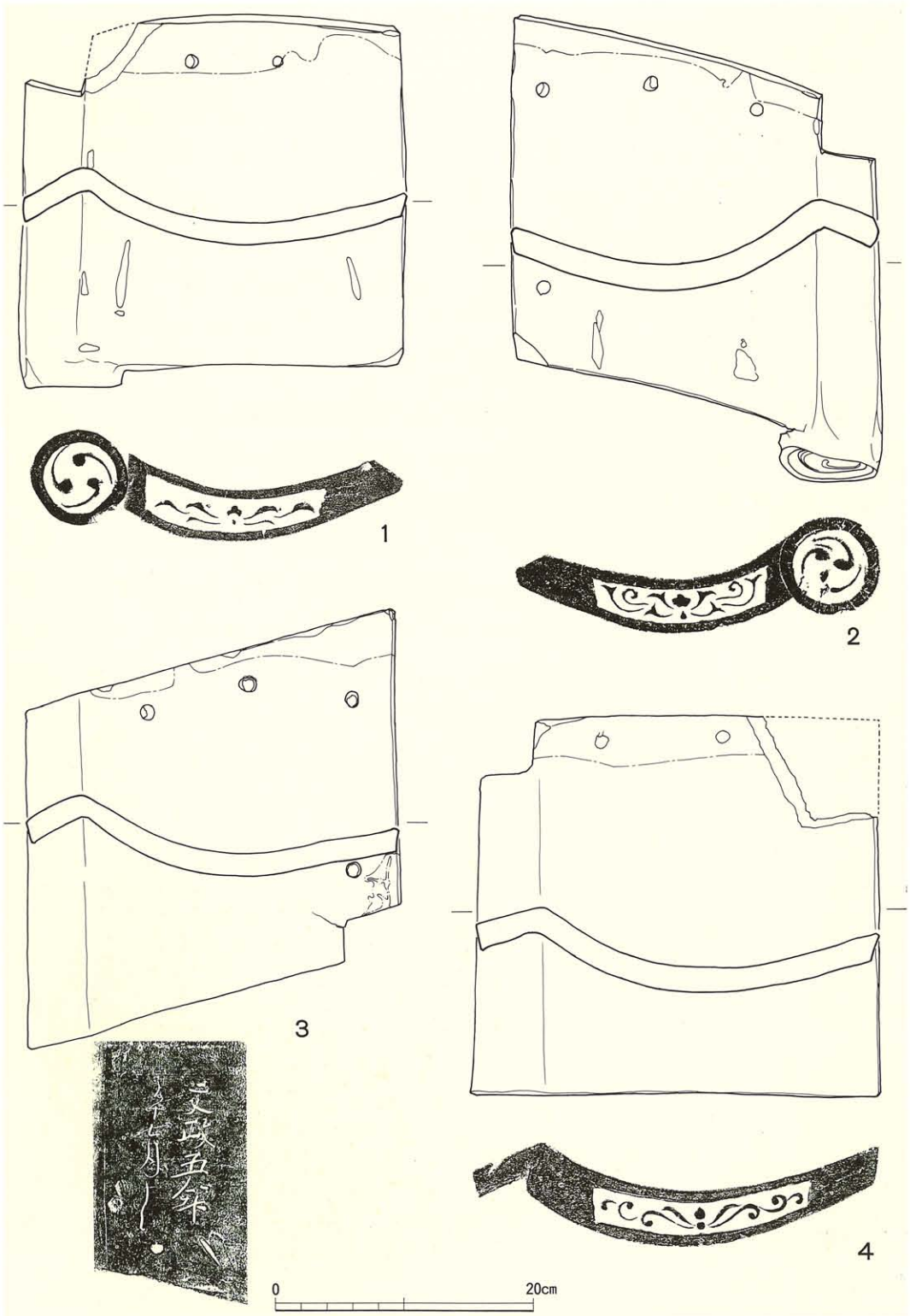

図５　仁右ヱ門山遺跡（１～３）、相生遺跡（４）出土瓦実測図

相　生　遺　跡

高津川から萩への旧道を西に向うと、やがて海岸部の喜阿弥（きあみ）地区とを分ける坂道にさしかかります。この旧道に南面する小さな谷あいの最も奥まった所で遺跡は発見されました。やはり赤瓦を中心に若干の陶器を生産した窯跡で、時期については、はっきりした所伝がないので限定できませんが、江戸時代後半に遡ると思われます。

この窯跡では**登り窯**１基、不良品などを投棄した**物原**のほか、瓦の製作に関わる**作業場跡**、製品の仕分けや焚木置場などに使ったらしいスペースなどが確認できました。調査では窯場のほぼ全域に近い1,600㎡を発掘し、その結果、瓦の製作過程と遺構の関係や、瓦の生産状況を考えるうえで貴重な知見を得ることができました（写真６）。

以下、瓦造りの過程を追って調査の成果をまとめてみたいと思います。

写真６　相生遺跡　窯場全景（調査後北東から）

瓦製作工程

瓦の原料となる土は窯場近くで採掘するのが普通ですが、むしろ相生遺跡のように窯場自体を粘土の入手・運搬に便利な山あいに築いたと考える方が自然でしょう。掘り出した土は作業場に持ち込まれ、土練り、形作り、仕上げ、乾燥、釉（うわぐすり）掛けの手順をすべて手作業で行い、窯詰めを待ちます。

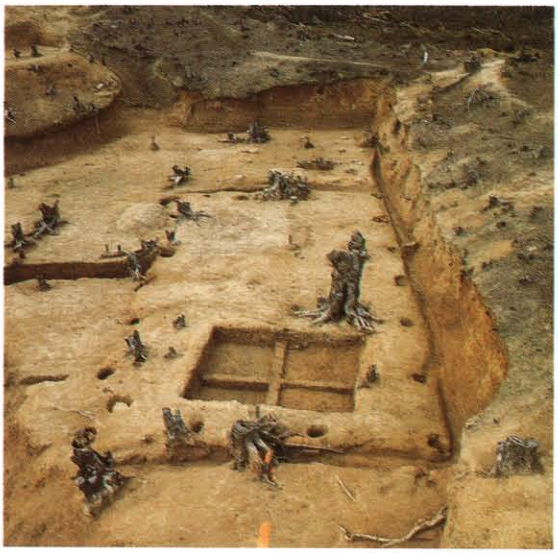

写真７　相生遺跡　建物跡
（手前　掘立柱建物、奥　礎石建物）

相生遺跡では瓦造りを行う作業場と考えられる建物が大小２棟あったことがわかりました。この建物は谷の最奥部をＬ字状に削り出した平坦地に縦列して並び、後背の山際との間、両建物の間に幅の狭い雨落ち溝がもうけられていました（写真７）。

大きい方の建物は６×11.6mを測り、平面長方形を呈しています。柱の間隔は３間×６間を測り、土中に直に埋め立てた掘立柱の建物だったことから屋根は草葺きだったようです。屋内は平坦な土間の床ですが、北東短辺に寄って2.7×3.2m、深さ0.3mの方形の穴が掘り込まれていました。これは樽（ふね）と呼ばれる穴で、この中で山の土を練っていたようです。練り上がると隣の土間で**桟（さん）瓦**、**軒桟瓦（のきさん）**、熨斗（のし）瓦、軒丸（のきまる）瓦、棟止（むなどめ）瓦といったように用途に応じて形作られたと思われます。

成形された瓦は次に隣の小さな建物に運ばれたのでしょう。これは4.2×5.4mを測りますが柱をのせる礎石を持つことから瓦葺の建物だったようです。この建物の場合、掘立柱建物側を除く３辺に２重の礎石列を持つのが特徴です。近年まで操業していた瓦屋の事例を参考にすれば、これが瓦の乾燥場だったようです。

この床も土間で、屋内にはレンガを組み合せた簡単な炉と、熨斗瓦を掘り肩に貼り付けた小さな穴が設置されていました。この周辺の床から煤（すす）の付いた土瓶、徳利、皿、碗のほか、釉の原料となる石を粉砕するのにも使用した石臼の破片などがみつかりました。恐らく、この瓦工房の職人たちが暖をとり飲食もしたことが想像できます。

写真 8　相生遺跡　白地配列状況

窯　詰　め

釉掛けの終った瓦はいよいよ窯詰めを迎えます。窯は石見地方で一般的な**連房式登り窯**（れんぼうしきのぼりがま）です。相生遺跡では削り出された丘陵斜面に主にレンガによって構築されています。焚き口（大口）とそれに続く８つの焼成室（房）と煙り出しを持ち、水平長で13.4m、房の幅約3.2m、勾配26°を測る並の大きさの登窯です。窯の上屋は草葺きの切妻構造だったらしく、両側縁沿いに柱穴が並んでいました。

房内はレンガを階段状に２～３段積み上げた列が10～15cmの間隔をおいて９列並んでいます。瓦はこのレンガ列の間の溝をまたぐようにして立て並べられていたようです。焼成室内を調査したところ、各房とも粘土の堆積がみられました。これは**白地**（しらじ）（焼成前の粘土の状態の瓦）が窯詰め後に焼かれることなく放置された結果、溶け流れたものでした。中には窯詰めの状態をほぼ残している部分もありました（写真８）。

数10時間に及ぶ窯焚きが終り温度が下がると、製品の搬出にかかります。窯の北西に隣接して伸びるテラス（12×４m）では焼き出された瓦の選別が行われたのでしょう。窯道具を離して一枚一枚取り上げていきますが、中には熔着したり、曲がったり、焼きが悪かったりして売り物にならない瓦も数多かったに違いありません。こうした不良品の山は物原として残されていました。

この窯場で焼かれなかった白地は窯内だけでなく、作業場の内外でも確認されました。このような状況はこの窯場があたかも突然操業を停止したような印象を与えます。その理由は不明ですが、いずれにしても稀有な例であり、瓦生産の実態を考える上では貴重な資料だと言えるでしょう。

写真 9　相生遺跡　出土瓦

おわりに

発掘調査の最終年度の今回は3遺跡の本調査と2遺跡の範囲確認調査を行い、無事終了することができました。

3年間の調査では近世窯跡3、古代の祭祀遺跡1、中世の祭祀遺跡1、そして古代の集落跡1を確認したことになり、従来遺跡の空白地であったこの丘陵上にも数多くの歴史が刻まれていたことが判明しました。いずれも益田市域の歴史を考える上で不可欠な資料であると言えるでしょう。

最後になりましたが、今回の調査にあたりご指導、ご協力いただきました関係各位に対し、記して感謝したいと思います。

㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター　㈶京都市埋蔵文化財研究所
山口県立埋蔵文化財センター　益田市教育委員会
島根県土木部港湾課空港整備室　島根県石見空港建設事務所

浅井亮治、池渕高史、井沢洋一、石川治男、石川隆男、石橋光子、伊藤晴明、伊野近富、岩崎仁志、岩本末子、岩本哲夫、上原眞人、大賀ヒサノ、大久保真紀、大島　操、大沢明美、大谷剛史、岡崎秋広、岡崎美人、岡崎礼一、岡元スエ子、岡本寅雄、加藤玉代、木原　光、木瀬高広、喜村晧司、久保田久子、久保智康、桑原喜雄、河野公雄、児玉　繁、小森俊寛、斉川敏子、榊原博英、佐々木恵美子、篠原益夫、城市定人、杉内恵美子、宅野　来、宅野千義、宅野マシ子、竹内勝芳、田中七五郎、田中義昭、田原　清、田原澄子、近重克幸、時枝克安、中尾　正、中島　清、中島昭二、中島春子、中島陸輔、中島保胤、中島由夫、中村　敦、永田智子、永安ユキエ、野田直子、長谷川博子、林　モモ子、原田敏照、藤井玄太郎、藤井　禎、増野隆一、松井忠春、松本清隆、松本　誠、松山智弘、間野大丞、水口晶郎、宮内　準、宮内フミ子、宮内正美、村上　勇、守岡正司、柳田タズ子、山口和美、山田和代、山本一志、横田貞代、吉田勝美、和崎幸子　（敬称略）

本冊子の執筆・編集は、文化課埋蔵文化財第2係文化財保護主事　西尾克己
主事　熱田貴保　　臨時職員　大庭俊次があたりました。

石見空港建設予定地内遺跡発掘調査概報Ⅲ
―― 大溢　仁右ヱ門山　相生 ――

発　行　　1991年3月30日

編　集　　島根県教育委員会
〒690 松江市殿町1番地
Tel (0852) 22－5946

印　刷　　黒　潮　社

表紙　大溢遺跡と日本海を南から望む